

# 大きな支援の力で歴史の象徴を取り戻す

—首里城再建を目指して—

高 良 倉 吉 (琉球大学)

## I. 首里城焼失

一昨年(2019年)10月31日未明に、首里城の主な建物が焼失した出来事は、私にとって耐えがたいほどの衝撃であった。30年余の歳月を費やして、その年の2月に復元事業はやっと終了したばかりだったのである。私は、当初からこの復元事業に関わってきたので、1週間ほど、茫然自失の状態であった。

だが、首里城焼失を嘆く沖縄県民の間から、「私たちの歴史や文化の象徴である首里城を、一日も早く再建して欲しい」という声が上がった。そして、再建を支援するための募金活動が相次いで開始された。また、県民のみならず、全国でも再建を願う動きが始まり、カンパ活動が展開されたのである。海外でも、同じような支援の動きがあった。すでに50億円を超える寄付金が沖縄県に寄せられている。

首里城とは、どのような存在なのだろうか。

## II. 首里城とは？

沖縄は、1879(明治12)年春に起こった「沖縄県」設置までの約500年間、「琉球王国」の時代が続いた。中国や日本、朝鮮半島、そして東南アジアの国々(現在のタイ、マレーシア、インドネシア、ベトナムなど)と活発な交流、貿易を行い、小国とはいえ、東アジアの海洋王国として独自の発展を遂げていた。

その交流事業の中心が首里城であり、1458年に首里城に刻まれたメッセージには、「わが琉球は、船を利用して、アジアの架け橋の役割を果たしている」と述べられていた。

海外との交流は、琉球の文化的発展をもたらした。サンシン(三味線)を中心に演奏される音楽や、それ

に合わせて踊る舞踊、漆器や紅型(びんがた)、芭蕉布などに代表される工芸、空手や古武道など、多くの琉球文化が花開いたのである。特に首里城を中心に、王朝文化と呼ばれる、華麗で格式の高い文化が発展したのである。

その象徴的な場面は、中国の皇帝が派遣した外交使節団(冊封使という)を首里城で迎えて演じられた芸能公演である。首里城の中心的な建物である正殿の前の広場に、特設の舞台を設営し、琉球王朝文化の華ともいべき芸能を披露した。琉球は小国だが、文化の面で誇るべき存在なのだ、中国使節団にアピールしたのである。

正殿は、首里城の顔ともいべき建物である。中国や日本の建築様式に学びながら、「琉球的」と評価できる独自の存在であった。

## III. 正殿の解体修理、戦争による消滅

1879(明治12)年に琉球王国の時代は終わり、沖縄県の時代になった。その後、首里城正殿は荒廃し、大正時代になると劣化が激しくなり、解体撤去されることになった。それを思い止まらせ、解体修理して、日本の文化遺産として永遠に残すべきだと活動した2人の功労者がいたのである。琉球文化の研究者だった鎌倉芳太郎(香川県出身)と、日本建築史の権威で東京帝国大学教授だった伊東忠太(山形県出身)である。

この両名の尽力によって、昭和の初めに正殿は解体修理され、国宝文化財に指定された。しかし、沖縄戦(1945年)のときに、日本守備軍(第32軍)が首里城の側に地下壕を掘り、そこを司令部としたために、アメリカ軍の猛烈な攻撃を受け、地上の正殿やそのほかの首里城施設が完全に破壊されたのである。つまり、

首里城は完全に消滅したわけである。

戦後、沖縄は日本の行政圏から切り離され、アメリカ統治下に置かれる。首里城の跡地は琉球大学のキャンパスとなった。

#### IV. 無形文化遺産の復興

沖縄戦は、県民生活の場が戦場になったために、多くの県民が戦火に巻き込まれ、命を落とした。県民の約25%、つまり4人に1人が戦死した。

しかし、確認すべき大切な事実がある。あの激しい戦争を潜り抜けて、4人に3人の人々が生き延びたということである。その人々は過酷な戦争の記憶をキープしながら、戦後という厳しい時代を歩むことになる。注目されるのは、伝統文化がたちまち復興したことである。

サンシンを作る技術を持つ人たち、それを演奏できる人たち、音楽に合わせて踊れる人たちがいて、伝統音楽と芸能はすぐに復活した。漆器や染織を製作できる人たちは伝統工芸をよみがえらせ、空手の達人は弟子を集めて伝統武道を広めた。つまり、琉球王国時代の文化は、戦争によって断絶することなく、戦後に継承されたのである。無形の文化遺産は逞しく存続し、現在の沖縄につながったのである。

問題は、戦争によって失われた首里城のような有形の文化遺産をどうするか、ということであった。

#### V. 沖縄と本土の専門家の共同作業

1972（昭和47）年、アメリカ統治下にあった沖縄は日本に復帰し、新しい時代が始まった。首里城跡をキャンパスにしていた琉球大学は国立大学となり、広大なキャンパスに移転することになった。移転後の跡地をどう利用すべきか、その問題が首里城復元の出発点になった。

城壁で囲まれた首里城を国営公園として、城壁の外側を県営公園として整備し、二つの事業を合わせて「首里城公園」とすることが決まった。そのなかで特に困難だったのは、正殿を始めとする多くの建物が建ち並ぶ国営公園事業の方であった。戦争によって跡形もなく破壊されただけでなく、首里城に関する貴重な資料も戦争で失われていたからである。

その困難な事業に対して、「首里城は沖縄県民にとってだけでなく、日本人全体にとってもかけがえのない文化遺産だから、その復元にぜひ参加したい」と名

乗り出た専門家がいたのである。日本の建築史や木造建築の権威である鈴木嘉吉先生（奈良国立文化財研究所所長）や稲垣栄三先生（明治大学教授）、金多 潔先生（京都大学教授）を始めとする本土の第一人者が復元の委員になった。そして、地元の建築や歴史、考古、美術、工芸などの専門家が委員となり、沖縄と本土のメンバーが力を合わせて取り組むことになった。私もその末席にいたのである。

#### VI. 画期的な資料の登場

復元プロジェクトの最も高いハードルは、首里城の象徴的な建物である正殿であった。琉球最大の木造建築であるばかりではなく、琉球の技術や美意識、価値観を集約したものだったからである。しかし、明治時代以後に撮影された写真や関連資料は見つかったが、それらの情報は正殿の外観のみであり、建物の内部は不明であった。

やがて、鎌倉芳太郎と伊東忠太の尽力で実現した、昭和初期の解体修理に関する工事資料が、東京の文化庁に保存されていることがわかった。貴重な情報だったが、やはり不完全であった。正殿は三階建ての建造物なのであるが、その内部に存在した数々の部屋や国王が座る玉座、それに建物の内部と外部に塗られていたはずの塗装に関する情報が含まれていなかったからである。

あきらめるしかないか、と思っていた頃に登場したのが、「寸法記」と通称されている画期的な資料だったのである。1768年に正殿の大修理を行った際の琉球王国時代の記録であり、鎌倉芳太郎が沖縄で収集し、東京の自宅で大切に保管していたのである。彼が他界した後、故人の遺志にしたがい、ご遺族がそのコレクションを沖縄県立芸術大学に寄贈してくれた。そこで、「寸法記」が登場したのである。

「寸法記」には、復元プロジェクトのメンバーが、喉から手が出るほどに欲していた情報が記されていた。私も、この資料によって、琉球王国時代の正殿を、自信を持って復元できると確信した。

そして、専門家や行政、職人など多くの人々の力を結集して、王国時代の正殿はよみがえったのである。正殿復元の成果をもとに、そのほかの建物や施設も着々とよみがえった。その作業が30年余に及んだわけである。

## VII. 焼失, そして再建へ

しかしながら, 一昨年の火災により, 正殿を始め北殿や南殿, 書院などの主要施設は焼失してしまった。1週間が経った後, 私はやっと火災の現場に足を運び, 痛々しい首里城の姿に向き合った。そして, 「多くの人々の力を結集して, 再びあなたをよみがえらせることができます。私もその作業に参加します」と誓った。

そしてすぐに, 非公式の勉強会をスタートさせ, 前回の復元(平成の復元と呼んでいる)の成果を確認しながら, 新たに登場する問題や課題について検討した。

日本政府は関係閣僚会議を開き, 国営公園である首里城の再建を決定した。沖縄県も, 県の立場でそれを支援すると発表した。政府の出先機関である沖縄総合事務局に「首里城復元に向けた技術検討委員会」が設置され, 各分野の専門家が委員となり, 私が委員長の役目を努めている。

今回の再建(令和の復元)では, 特に防災や防火の問題が重要なテーマになる。二度と火災の犠牲にならない首里城を目指すのである。検討作業は着々と進んでおり, 5年後の2026年度には首里城の顔である正殿が完成する予定である。そして, その後に北殿や南殿などの周辺の建物をよみがえらせる計画になっている。

## VIII. 多くの人々の思いに応えたい

先ほど触れたように, 県内や県外, 国外からも首里城の再建を願う支援の動きがあった。私が特に印象的だったのは, 焼け残った赤瓦のボランティア活動の姿であった。

台風で飛ばされないように, 瓦は, 漆喰で固定されている。焼け残った瓦を, 今後の再建事業で再使用するためには, 漆喰をそぎ落とす必要があるが, なかなか難儀な仕事なのである。その作業のためのボランティアを募集したら, 予想を超えるたくさんの応募があった。県内はもとより, 県外の方々もわざわざ参加し, 黙々と作業に取り組んでくれたのである。

新型コロナウイルスの感染拡大のため, 計画どおりの日程はこなせなかったが, 力強いボランティア活動であった。そして, 首里城再建に向けた熱い思いが伝わってくる光景であった。

首里城は, 沖縄の歴史や文化を象徴する有形の文化遺産であり, そのことを多くの人々が理解し, 再建を期待していると受け止めている。

平成の復元に関係し, また, 令和の復元にも携わる者の一人として, 皆さんの思いに応える覚悟である。